

「多元化する「能力」と日本社会
——ハイパー・メリトクラシー化
のなかで」のレポート

7 1 0 5 0 1 6 2

環境情報学部

和田 尉吹

<本書の概略>

最近、「OO力」(ex.就職力、脳力など)というタイトルの本を良く見るようになった。そこから現在の日本社会は「力」を渴望していることがわかる。つまり能力の多元化という現象が如実に表れてきている。

その傾向や問題点をハイパーメリトクラシーというキーワードを手がかりに読み解いていく。

<序章>

序章はメインキーワードの解説と今後の論の方針を述べる。

従来のメリトクラシーは学歴(学力)など手続きの公正さが人々の社会的位置づけを決定する。一方、ハイパーメリトクラシーはポスト近代化によるメリトクラシーの発展形態で、場面における個人の実質的有用性に則される傾向にある。

また、近代では基礎学力、標準性、知識量、順応性、協調性が必要とされていたのに対し、ポスト近代では生きる力、多様性、意欲、創造性、個性、能動性、交渉力が必要となっていることを明らかにする。

以上の点をふまえ、ポスト近代型能力は重視されつつあるが、近代型能力の意義が現在でも薄れたわけではなく、両者が混在する現在となっている。

以後、従来のメリトクラシーと近代、ハイパーメリトクラシーとポストモダンの対比軸をもとに論が展開されていく。

<第一章>

第一章ではハイパーメリトクラシーの流れを述べる。

学校教育を例にとると、特定分野に突出するのではなく万遍的に質の高い人間を育成しようとする。その結果、知識の量は多いが目標設定が不明確な”創造的人材”が作られることになる。これは教育だけでなく政治経済もそれぞれが求める人材にどれも相似性がみられることである。これをハイパーメリトクラシーの大合唱と呼ぶ。

ハイパーメリトクラシーの大合唱の問題点は我々のものの見方が一色に収斂しつつあることにある。これを解決するためにはハイパーメリトクラシーを相対化し、新たな道を模索する必要がある。

<第二章>

第二章では小中学生のハイパーメリトクラシーを中心に述べる。

一昔前(90年代前半)の主流は機械的になりがりと努力する”閉じた努力”だったのに対し、

今(05年)の主流は環境によって自分のあり方や目標を自ら選びそれに向かい努力する”開かれた努力”になっている。つまり、努力は能力の一部として見なすべきという流れが強まっている。

子どもにとっての「努力」が必ずしも「勉強」だけに向けられるものではなく、環境からのさまざまな刺激や圧力のなかで自分のあり方を維持するということも、重要な「努力」の構成要素となっている。頑張る対象が変化し多様化している現状がある。

また、過去10年の子供の変化として①生活習慣のゆるみ②親との会話内容の私的領域化③親からの期待の希薄化④勉強(時間)の後退⑤友達が多いと感じる度合いの低下を挙げ、これらが子供の努力と大いに関係していることを明らかにした。

<第三章>

第三章は高校生を中心に述べる。

一昔前(80年前後)は中学生の学力に基づいた各高校への振り分け。さらにそこで振り分けられた各「ランク」の高校内での高校生の学力に基づいた高校卒業後の進路の振り分け。高校の力が大きい傾向があった。しかし、一方、今(00年前後)は勉学の姿勢低下、自分の学校への誇り、親の期待に応えるための勉強がなくなる。つまり高校という生活の場のウエイトが低下している傾向がある。メリトクラシーが弛緩し、対人能力の重要化していく様子がここから読み取れる。

国際比較を行っても、日本は自由な生活を楽しむことを重視する。それに対して、韓国は進学知識・礼儀など近代型能力を身につけることを重視する。前者は”多元的思考-選択的分化”の傾向があり、後者は”一元的思考-強制的分化”がある。なお、この時“多元的思考-選択的分化”は出身家庭の社会階層の影響を受けやすい。

以上から、日本のハイパーメリトクラシーに個性が重視され、対人化が進む特徴があることがわかった。そして、コミュニケーション能力が逆に高度化、そして学力の高い人間ほど対人能力が高くなっているとわかった。

<第四章>

第四章では小中高生以外の若者について述べる。

一昔前の社会地位は学歴、所得、職業で決まったのに対し、今日では財や生活様式の「上下」に関する軸がぶれ、生活の多様化による独自の意義主張によってあいまいになっている。

また、社会的排除の状態(失業、貧困、孤立、無力感あるいは逸脱的行動などにより、社会の一員になれない状態)と社会的包摂(個々人はその社会的存在を構成する諸側面の

中で特定の部分については社会的”包摂”されつつ、別の面では排除されている状態）が組み合わさることによりその”あいまいさ”に拍車をかける。

学校を出てすぐ正社員として就職し、やがて結婚して一家を構えて子どもをもつという単直線的な『大人』への筋道が見えにくくなっている。

それをふまえ、学生以外の若者は「ライフスキル」（社会的地位に影響を及ぼす可能性がある「能力」ないし「スキル」のこと）が必要となってきた。

「ライフスキル」には①家事スキル（衣食住）②テクニカルスキル（対人コミュニケーション、コンピュータスキル）③メンタルスキル（メンタルの強さ、ポジティブ、ネガティブ、有能感）の3つの種類がある。家事スキルは女性は年齢とともに増加（男性は違う）テクニカルスキルは男女ともにコミュニケーションスキルより、コンピュータスキルのほうが高い。メンタルスキルは女性はネガティブ、男性はポジティブかつ有能感をもつ傾向。このようにそれぞれ特徴がある。

3点の相関関係としては・家族が経済的に豊かなほど、どのライフスキルも平均的に高い・家族の親子関係が密接なほど③の有能感のポイントが高くなる。・家族との同居で①のライフスキルのポイントが減るという関係がある。

同様にメンタルスキルのポジティブとテクニカルスキルのコミュニケーションスキル、メンタルスキルのコミュニケーションスキルとコンピュータスキルの能力にそれぞれ相乗効果がある。

これをふまえた新たな傾向として、学歴や労力などの近代型能力と収入とが相互に関連していない傾向がある。つまりメリトクラシーの後退しハイパーメリトクラシーが浮上してきている傾向がある。

では青少年のライフスキル向上と「社会地位」の獲得のために何が必要か？

まず、男性の家事スキルを増大させ、女性の家事負担を減らす。これによって男女の職業面家族面でのバランスのとれた社会的地位の獲得をはかる。

次にコンピュータスキルのアップに知的能力を組み合わせる。「教育達成から職業達成へ」というメリトクラシーの枠組みに合わせ、それに加わる豊かな人間力を養う。

最後にネガティブ、ポジティブ、有能感のバランスを整え、健全な精神を作り上げる。

以上の3点が必要である。

<第五章>

第五章では母親のライフコースを述べる。

男性である父親の長時間労働従事では子供にかかわり合う時間がない。そこで母親に「中身そのものが極めて広範囲かつ高濃度な子育て」が要請される。その要請にすべて応えよ

うとするパーフェクトマザーが出現する。

このようなパーフェクトマザーは子どもが現代社会において、不利な状況に落ち込まないように育てる難しさとその多大な負担の予測を立てるので少子化の原因となっている。

「高い学歴を得れば、収入面で恵まれる」、「学歴は親の教育方針で決まる」というような近代能力を重視しつつ、ポスト近代型能力も視野に入れる親に子どもがいない。一方、「学歴は本人の実力で決まる」というような放任主義的な親には子どもがいるという例からみてもこれは明らかである。ハイパーメリトクラシー化が女性の子どもを持つ or 持たないの選択を左右している。

ところで、少子化対策は効果がない。なぜなら、問題に対するポイントが違うからである。母親の育児負担に関する議論は存在しても、それらが、主に問題としてきたのは乳幼児期における最低限の制度的経済的支援や育児の心理ストレス。しかし、子供が学齢期になってから後にも継続する母親による日常的な細かい配慮が注目されていない。

そこでパーフェクトマザーから脱出する必要性が生じてくる。そのためには①別のエージェント（つまり父親）に子どものポスト近代化能力育成を分担②ポスト近代能力育成の機会を設ける③ハイパーメリトクラシー化を食い止める。この3点が考えられる。

①は父親もパーフェクトファーザーになるという側面があるが、現代社会の様子を考えると厳しい。②と③はどうか？次の章で扱う。

<第6章>

第六章では対処法とまとめを述べる。

メリトクラシー下では人々は自分の柔らかい内面は保持したまま「近代能力」を獲得できた。しかしそれに対して、ハイパーメリトクラシー下では個々人の何もかもをむき出しにしようとする視線が社会に充満。よって常に気を許すことはできない。

この特徴をふまえ、前章で述べた2点以外にもう一つ、0番目の対処法が考えられる。

0番目の方法とは、だめな自分を許容して、地位達成を志向せずに最低限の生活費のみをなんとか調達し、身近な人間関係だけで生きて行く方法である。メリットとして、自由に自分らしく生きれる。しかし、デメリットとして根本的な解決にならない点がある。例えば生産性が低下し、GDPが下がるおそれがある。

では他の方法はどうか？

前章②のポスト近代能力育成の機会を設ける方法。家庭はそれぞれの家庭でポスト近代能力に差がでて、それがそのあいまいさが親と子の関係を息苦しいものになる。地域は行政では提供できないような多様かつ柔軟な相互支援のあり方ができるが、ポスト近代能力の地域内格差または集団主義が押し付けられる。学校は家庭や地域よりも明確な制度、つ

まりはコントロール性が高い。しかし、ポスト近代能力と学校制度の構造的差異がある。教師と生徒の人数比に限界があり、十分な配慮が不可能である。

では前章③のハイパーメリトクラシー化を食い止める方法はどうだろうか？

この方法は専門性をつけることに重点をおく。ハイパーメリトクラシー下では意識的かつ創造的でなければいけない。しかし、これによって自らの専門性という一定の枠組み内でのみある程度意欲的かつ創造的であればよい。メリットは一定の学習期間で習得可能な点。専門性という内容で結ばれた共同体に個人が属する点。つまり対人的つながり、コミュニケーション力が上がる。アイデンティティの形成される点。つまりやりたいことと現実社会の需要を冷静に判断できる。責任感や自己効力感の育成できる点。以上が挙げられる。デメリットは専門性をつけることができないまま社会に出る者が一部、あらわれる可能性がある。

しかし、デメリットに比べメリットが大きく、それをカバーできる。ハイパーメリトクラシーの渦中に無防備な柔らかい状態のまま放り出され、蹂躪されるのではなく、一定の足場に自らの足をつけ、一定の『鎧』を装備した上で、戦ってゆくことができるようになる。

しかし、あくまでこれは1つの対処法。もっといろいろな対処法が提起されるべきである。

【考察】

データと結論の一貫性に若干違いがあったり、現代の問題(ポスト近代)をすべてハイパーメリトクラシーを主軸に片付けようとしている点に無理がある気がした(これらはあとがきで本人も認めているようである)。また、他の教育社会学者(竹内洋や荻谷剛彦など。特に「メリトクラシー」を本のタイトルにつけた竹内)の著作と比較して学歴と社会構造の相関関係や社会階層の面の説明が弱かった気がする。

しかし、日本社会と自己の問題意識がつながっているという着眼点は評価できる。この著作によって浮き彫りにされた問題に対して、今後どのように議論されるか。対処法がどう提起されるかが鍵であると思う。

【参考文献】

本田由紀 多元化する「能力」と日本社会 ハイパー・メリトクラシー化のなかで NTT 出版 2005 年

荻谷剛彦 大衆教育社会のゆくえ 中央公論社 1995 年

竹内洋 日本のメリトクラシー—構造と心性 東京大学出版会 1995 年

